—広　告—

KIT
キャンパス
レポート295

文・杉村裕之

有言実行のリードオフマン。こんな青年が日本を変える。

中屋 飛人（なかや たかと）
金沢工業大学
工学部
情報工学科四年
富山県立滑川高等学校出身

「夢を言葉にして周りに伝え、取りあえずやってみる」。何かに挑戦するとき、自分から逃げないために課す中屋さんのルーティンである。「こうすると必死さが増し、実現の難しいことでも、案外、うまくいくんです」。取材中、人懐こい目がクリッとよく動いた。

そのひとつが、二年次に参加したサイバーセキュリティの未来を担う人材育成のための長期ハッカソン「SecHack365」である。NICT（国立研究開発法人情報通信研究機構）が二十五歳以下を対象に開催するもので、難関を突破して全国四十人の一人に選ばれた。

情熱のすべてを注いだという応募課題提案書では、ネットワーク技術を学び始めた初心者にとって、無機質な固有名詞の多さが理解や興味を遠ざけていると分析。通信状況をリアルタイムで視認できないことも、それに輪をかけているとして、ネットワークを可視化するアプリの開発を提案した。

具体的には、インターネット接続に用いるTCP/IPの各階層を「島」、代表的なプロトコル（送受信の手順などを定めた規格）を「キャラクター」としてビジュアル化した。そして、送受信の流れを、島にキャラクターが「出現→成長→消失」する動きと変化で表現したのである。

「パソコンに触ったのは大学からで、正直、レベルの差を感じました。しかし、放課後、毎日こつこつと取り組み、メンターの技術サポートも受け、完成させることができました」。聞けば、ハッカソンの参加仲間に、互いの作品の検討や意見交換をするオンラインの〝朝活〟を呼びかけ、午前六時に起きてリードしていたそうだ。

周囲を巻き込む彼の高いポテンシャルを知るエピソードを、もうひとつ紹介したい。学生目線に立った分かりやすいパソコン系技術書の編集である。学内に呼びかけて十四人の同志を集め、昨年十一月、「Project Kit Vol.1」を発刊、今年五月、二冊目を発刊した。制作費は、彼がICT関連のコンテストに応募して得た賞金を充てた。まさに、有言実行のリードオフマンと言えるだろう。

高邁な理想をいくら説いても現実は微動もしない。「夢を掲げ、まず動く」を率先するリーダーを人は見抜き、追いかけていく。中屋さんは自らの進路を、「大手通信会社で情報セキュリティの最先端を担うこと」と見定めているが、閉塞感と停滞感の募る日本にいま必要なのは、間違いなく彼のような青年である。

金沢工業大学
石川県野々市市扇が丘七-一
電話番号（〇七六）二四八-二〇〇